



Title	中国朝鮮族における婚姻儀礼の変化
Author(s)	小坂, みゆき; Kosaka, Miyuki
Citation	研究論集, 11, 51(左)-69(左)
Issue Date	2011-12-26
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/47869">https://hdl.handle.net/2115/47869</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_RONSHU_11_KOSAKA.pdf



# 中国朝鮮族における婚姻儀礼の変化

小坂 みゆき

## 要 旨

中国朝鮮族の社会は、本来は農村社会であり、その社会固有の儀礼・習俗を持っていた。しかし、漢族が大多数である中国社会の中での少数民族という立場から、中国社会の枠組みの中で起こる社会現象や、漢族の影響を受けることは避けられない。また、経済自由化政策による中国社会全体に広がった市場主義的経済観の影響を受け、朝鮮族社会の生活環境、生活習慣は大きく変化するにいたった。

特に、中国朝鮮族の現在の特徴的な現象として、韓国等の外国への出稼ぎがあり、家族の中に出稼ぎ者のいない家庭はないと言っても過言ではない。このことは、日常生活のみならず、年中行事や婚姻儀礼などの人生儀礼の実施においても大きな影響を及ぼしている。また、出稼ぎ者の収入により、家庭は経済的には少しずつ裕福となり、農家をやめ農村を出て都市部で暮らすようになった家庭も多数現れている。農村社会であったこれまでの中国朝鮮族社会は急激に解体の方向に向かっている。一方、日常的に出稼ぎ者不在の状況のもとで都会生活を営むようになった人々により、新たな中国朝鮮族の文化、生活と呼べるものが生み出されている。

民族固有の文化といわれたものであっても、時の経過とその時々を取りまく環境によって変遷を遂げていくものであり、ゆるぎなく確立されたものではない。変化はその時々における民族を構成する人々が自らの生活のなかで選択した結果なのであって、それもまた一つの文化の姿である。

本稿では、中国朝鮮族における婚姻儀礼を動態として取り上げ、その変化を分析するものである。分析方法は、現地における経験的参与観察から得たデータを基本とし、朝鮮半島から中国に移住した後、中国での急激な社会変化を経て、中国と韓国との往来という移動を頻繁に実施している今日までの間を比較分析した。

朝鮮族の人々の婚姻儀礼も、社会・生活環境の変化に伴い変遷を遂げているものの、婚姻儀礼を完全に放棄しているわけではない。婚姻当事者にとっては新たな家庭を築くうえで大切なものであり、民族に伝わる儀礼を行いた

いという欲求は失われることはなく、変遷を遂げながらも残されていく儀礼の1つといえる。

朝鮮族の人々が、婚姻儀礼のうち、何を大切な部分であると理解し、そのまま残そうとし、あるものは簡略化し、あるいは省略するなどしたのかという点は、近代化、社会環境の変化、生活様式のグローバル化が進むことによる要因が大きい。これは近代化の波にさらされる他の民族においても同様であり他民族における婚姻儀礼の変遷にも共通する。

本稿においては、この研究を通じて得られた資料・知見等をもとに、中国朝鮮族にとどまらず、他民族においても示唆的であると考えられる婚姻儀礼の変化要因となるものについて分析、考察しそれを指摘した。

## 1. はじめに

朝鮮半島から中国へ渡り、中国の国籍を持つに至った朝鮮の人々は、現在、中国少数民族の1つである「朝鮮族」として中国各地で暮らしている。

1980年代初めから始まった中国朝鮮族の出稼ぎブームは、今日もなお続いており、農村から都市へ、出稼ぎのための集中的な移動が見られる。吉林省、遼寧省、黒龍江省の東北三省以外に住む中国朝鮮族も同様で、北京、上海、青島などの都市へ出稼ぎに行く人が少なくない。しかし、ここ数年の中国朝鮮族の出稼ぎ先は圧倒的に韓国である。

2009年、韓国における90日間以上の中期滞在中国朝鮮族の数は、36万3,087人で、韓国に滞在している中国人総数48万8,651人の74.5%を占めており、2008年に比べると167人増加している(注1)。多くの中国朝鮮族が韓国に出稼ぎに行っているということは、日本にいても、中国から来た中国朝鮮族の留学生との会話から実感することができる。彼、彼女らの両親とも、またはそのどちらかが韓国に出稼ぎへ行っている場合がほとんどである。

中国へ移住した第二世代以降の中国朝鮮族にとっての出稼ぎとは、祖先が取得した中国国籍を持ちながらにして、祖先の生まれた国へ行き働くということである。本人にとっては生まれ育った国ではないが、祖先の故郷へ帰り、そして、再び中国へ戻って生活を営むということになる。中にはそのまま韓国に残る人、そこから第三国へ行く人と様々である。第一世代の移住と、今日盛んに実施され、繰り返されている第三、四世代の中国と韓国の往来は、いずれも中国朝鮮族の日々の暮らしの中で、食事、道具、衣服、習慣、思考などに影響を与えている。

中国朝鮮族の祖先は、中国において国籍を取得し、国内では朝鮮族という少数民族として扱われることになったが、中国朝鮮族の生活は、移住や国籍の変更の時点において分断されたわけではなく、一貫して朝鮮族という同一線の延長線上に存在している。しかし、朝鮮半島から中国への移動が行われ、その後少数民族として中国社会に組み込まれたことは、移動した朝鮮族の生活に大きな変化をもたらした。中国朝鮮族の生活・文化は、祖先の故郷である朝鮮半島

で形成されたものを基本とし、その置かれた社会環境等に対応して変化し続けている。ただ、それは中国朝鮮族固有の事象というわけではなく、他の民族においても同様に起こり得ることである。

本稿においては、中国朝鮮族において行われてきた婚姻儀礼を取り上げ、現在に至るまでの変化の態様とその変化が生じた原因について分析を行う。調査の範囲としては、朝鮮族の人々が朝鮮半島から中国に移住した時期をはじめとし、その後の急激な社会変化、朝鮮族において韓国等への出稼ぎが日常的となった今日までを対象とした。

調査対象である婚姻儀礼においては、何が残され、何が放棄され、何が形をかえて維持されてきているかを分析し、これらの選択に、何らかの傾向性・法則性が見出せないか検討する。更には、このようにして得られた選択の傾向性・法則性のなかに、当該民族固有のものを超えた他の民族にも共通する要素の有無とその内容について検討を加える。

婚姻儀礼などの儀礼は時代の変化、社会環境の変化によって変遷していくものであり、それはその時代の人々が自らの生活の中で選び取ったものである。しかし、このような選択は、当該民族固有の事象ではなく、他の民族社会においても生じることであり、その選択には一定の傾向性・法則性が窺われると考えており、この研究においてそれを明らかにしたい。

なお、婚姻儀礼などの通過儀礼についてはファン・ヘネップの理論があり、本稿もこの理論を前提としている。これによれば、通過儀礼とは「場所・状態・社会的地位・年齢のあらゆる変化にともなう儀礼」と定義される [V. W. ターナー 2006: 125]。ファン・ヘネップは年中行事も含め、儀礼には境界を通過するという意味を持つとし、通過儀礼を分離儀礼、過渡儀礼、統合儀礼の3つに分類した。過渡儀礼は婚約期間に多く見られ、統合儀礼は結婚式に多く見られるとしている [ファン・ヘネップ 1977: 100]。儀礼が行われることにより、個人は個人をとりまく家族、親族、地域社会での地位や役割を得るのである。

通過儀礼と同様の意味で用いられる言葉に人生儀礼がある。人生儀礼は人生を1つのサイクルとし、その中の節目毎に実施される儀礼をさす。具体的に言えば、誕生にまつわるもの、成人式、婚礼、葬送などであり、通過儀礼と人生儀礼はほぼ同義である。

民族名称については、中国の少数民族における朝鮮族については「中国朝鮮族」とし、朝鮮族とは区別する。大韓民国で見られる現象については「韓国」、朝鮮民主主義人民共和国で見られる現象については「北朝鮮」、朝鮮半島が南北に分断する以前の現象については「朝鮮」と表記し区別する。朝鮮語を用いた名称は片仮名で示す。

## 2. 中国朝鮮族の概況

中国朝鮮族が中国における少数民族として公認されてから62年が経過した。1949年に中国共産党政府が実施した中国国内に居住する人々を民族別に区分する民族識別工作により、中国

の民族は56民族に細分化され、中国朝鮮族もこの時点で一民族として認定されたのである。さらに遡ると、朝鮮族が最も多く中国に移動したのは、19世紀であり、その時点から2世紀が経過した。最初に移住した一世代目の人々は80、90歳代となり、この世代の人々の話を聞くことは徐々に難しくなっている。現在は五世代目が誕生している。

中国朝鮮族は、清朝、ロシア、日本による支配や領土拡大、中国国内においては文化大革命などの政治的背景と朝鮮半島における朝鮮戦争などの歴史的背景を持つ。また、現在の中国においては圧倒的大多数である漢族のほか、満族、蒙族や回族などの他の少数民族と常に接触しながら生活している。近代産業の影響や欧米文化の影響、そして中国内の韓国企業や出稼ぎ先である韓国からの文化の再導入などがあり、移住後の朝鮮族は中国の政治、経済や文化と祖国でもある韓国の両方からの多大な影響を受けている。

中国朝鮮族の人口は、2000年に実施された国勢調査によると192万3,842人(注2)である。中国朝鮮族は、北京、青島、内モンゴルほか中国各地に点在し、韓国をはじめ日本やアメリカなどで労働や留学している者も少なくない。中国朝鮮族が最も多く居住しているのは、中国東北三省の遼寧省、吉林省、黒龍江省である。3省合わせて177万5,198人なので約9割がこの3省に集中して居住している(注2)。

### 3. 出稼ぎと中国朝鮮族の生活

中国朝鮮族が出稼ぎに行く直接的な理由は、金銭を得るという生活の必要からであったが、更に、より豊かな生活を送るためにより多くの収入を求めようになっていった。中国では稼ぐことができない高収入を得、中国国内に住む他の人たちよりも良い暮らしをするためである。1ヶ月の収入は日本円にして20万円弱であるが、韓国での生活費を除いた分は中国へ仕送りする。子供の学費、家の購入、そして基本的な生活費を稼ぐことを目的としており、さらに余裕ができた場合、車の免許を取得し車を購入することを考える者もいる。中国朝鮮族がこのような韓国への出稼ぎを可能にした理由は、朝鮮語が使えることである。

海外での出稼ぎ生活は、ビザを取得し、海外へ行き、仕事を探し、そして働き始めることにより始まる。しかし、それ以前の生活もまた、出稼ぎに行くための長い待ち時間である。出稼ぎ先のほとんどが韓国であり、そこから戻った人の話を聞き情報収集をする。夜になると韓国で働いている身内からの近況報告や中国に残してきた子供の様子を聞くための電話がある。出稼ぎ経験の豊富な人を囲み、どうすればビザがおりるか、韓国ではどのような仕事につけるか、韓国の生活はどうか、そこに行くことになったら何を持っていくべきか、米・味噌・下着などはとても高いので絶対に持っていくべきだなどという話やアドバイスをうける。出稼ぎに行っていないでも、出稼ぎに行っていないくても、日々の暮らしは出稼ぎと切り離すことはできず、どうすれば韓国へ行けるか、いくら稼ぐことができるかについて毎日語られているのが現状である。

小坂：中国朝鮮族における婚姻儀礼の変化

2008, 2009 年に行ったアンケート調査では(注3), 各家庭で出稼ぎに行っている人がいる場合の割合は79%であった。その中でも出稼ぎ先が韓国である場合は, 2008 年で86.3%, 2009 年で89%となっている。更に, 誰が行っているかという問いからは, 2008 年を例にとると, 203 家庭中116 家庭が, 父が出稼ぎに行っている家庭であり, そのうち韓国へ行っている家庭は103 家庭である。母が出稼ぎに行っている家庭は105 家庭であり, そのうち韓国へ行っている家庭は92 家庭である(表1, 2)。中国では, 中国朝鮮族に限らず, 田舎, 農村から国内の大都市へ出稼ぎに行くことは珍しくはない。このことは中国朝鮮族も同様であり, 国内の大都市へ出稼ぎに行く人は多い。中国朝鮮族の場合, 特に10 代後半, 20 代は外国へ出稼ぎに行くにはまだ若いと考えられるため, 中国国内の大都市に行くケースが多く見られる。

表1 出稼ぎ先はどこか('08)

	韓国	中国									日本	ロシア	スペイン	ルーマニア	無回答	合計	
		中国	上海	広州	北京	南京	琿春	青島	江蘇	威海							
祖父	2																2
祖母																	0
父	103		2	2	2		1	1			1	1	1	1	1		116
母	92	5	3	1			1		1		1	1					105
兄	3	1	1		1	1											7
姉	2			1		1				1							5
弟																	0
妹																	0
オジ	3																3
オバ	2																2
合計	207	6	6	4	3	2	2	1	1	1	2	2	1	1	1		240
		26															

表2 出稼ぎ先はどこか('09)

	韓国	中国						日本	オーストラリア	(マカオ)	(サイパン)	合計	
		北京	青島	四川	煙台	広州	永吉						
祖父	3											3	
祖母	6											6	
父	59			1	1	1				2	1	65	
母	63	2		1			1					67	
兄			1									1	
姉	1	1	1									3	
弟	1											1	
妹												0	
オジ	2								1			3	
オバ	3							3				6	
合計	138	3	2	2	1	1	1	3	1	2	1	155	
		10											

出稼ぎがブームとなり始めた1980年代は国内の大都市へ行くことが主流であり, 主な出稼ぎ先は北京, 青島, 上海, 広州などである[韓 2001:262]。韓[2001:227]によると元々稲作を生業としていた中国朝鮮族が離農するきっかけとなったのは, 1980年代に入ってからで, 集団農業から請負制農業への移行により, 農業だけの収入では生活が困難となったためである。

北京市への中国朝鮮族の出稼ぎ数は、1982年3,904人、1990年7,400人、2000年には3～5万人となり[聶 2005:25]、1990年代後半から2000年代にかけ万単位で増加していることがわかる。

海外、特に韓国へ出稼ぎに行くようになったのは、1990年代のことである。1992年の韓国と中国の国交回復が中国朝鮮族の韓国への道を開いた[李 2007:352]。そして、この時期から韓国企業の中国進出や、韓国へ出稼ぎ者が急増したのである[韓 2001:303]。特に韓国経済が上昇した2000年初頭は中国への景気拡大を背景として、中国へ進出した韓国企業も少なくなかった。韓国経済のバブルが崩壊したことは、中国朝鮮族の出稼ぎにも影響を及ぼしていると言われるが、それでも韓国へ出稼ぎを希望する中国朝鮮族は多い。

筆者のインフォーマントの家族およびその親族は、調査へ行くたびその家族構成が変化している。その理由は海外または国内へ出稼ぎの出入りによるものである。

#### 4. 調査地および調査方法

本研究に関する調査は、2006年から継続して実施しているフィールド調査が主となっている。婚姻儀礼に関する調査は、2009年、2010年に実施した。調査地は中国吉林省吉林市昌邑区である。吉林市の緯度は旭川と同様に北緯43度である。ここには鉄道の吉林駅があり、中国朝鮮族小学校、中学生と高校生が通う吉林市中国朝鮮族中学がある。ここには中国朝鮮族が多く居住する建物や中国朝鮮族の飲食店、食糧品店、雑貨店が並ぶ。また、中国朝鮮族群集芸術会館も置かれている。現在は中学校の側に小学校を移設する工事が進められており、完成すればなお一層中国朝鮮族が集中的に居住することになると推測される。

調査方法は、吉林市在住のA夫婦の家族と寝食を共にするという経験的参与観察(注4)と、20歳代～90歳代の女性への聞き取り調査とアンケート調査である。

インフォーマントであるA氏の生年は1938年、A夫人は1939年である。2011年の時点でA氏は75歳、A夫人は74歳であった。アンケート調査の対象は永吉県朝鮮族中学校、吉林市朝鮮族中学校の高校1年生、男女(123名)である。他には、婚姻儀礼の観察と映像資料の観察も実施した(注5)。中国への移住以前、朝鮮における婚姻儀礼がどのようなものであったかを知るためには文献資料を用いた。なお、中国朝鮮族は数えて年齢を数えるため、誕生の時点で1歳となる。

#### 5. 先行研究

##### 5-1. 中国朝鮮族に関する先行研究

中国朝鮮族の移動、出稼ぎに関する研究は、出稼ぎの増加に伴い関心を集めるようになった。

中国朝鮮族研究会の編集による[2006]『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク ―「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』に掲載されている各論文は、朝鮮の地を離れて移住した人々による中国朝鮮族社会形成の経緯から、中国国民でありかつ少数民族であるという中国朝鮮族の置かれた複合的な立場に着目し、彼らの自集団に対する意識や外部との接触の方法等を研究対象としたものである。この中には日本在住の中国朝鮮族を対象としたアンケートや直接のインタビュー方式による詳細な調査結果の報告も含まれている。複合的な立場をもつ中国朝鮮族が、その複合性ゆえに朝鮮半島で生活する朝鮮族の人々とも異なる社会を形成していることを報告している。

高全 [2007] の『ディアスポラとしてのコリアン』は、朝鮮族の離散をキーワードとして編纂されたものであるが、これらの各論文は、農村中心に形成されてきた中国朝鮮族社会が、経済自由政策によって人々の志向が都市生活に向けられるようになり、中国朝鮮族社会の生活環境や生活態様が大きく変化していること、特に「出稼ぎ」がその変化の大きな一因となっているとする。しかし、それを、権 [2007] のように、これまで維持してきた中国朝鮮族の文化が崩壊し、これに代わるものがいまだ生まれていないとして悲観的にとらえる見方がある一方、バーナード [2007] のように、これらの動きを「変容」ととらえ、中国朝鮮族が集団独自の文化をつくりあげようとしているとする肯定的な見方もあり、現状に対する評価は現在のところ多様である。

## 5-2. 民族移住と文化の変化に関する先行研究

中国朝鮮族は、歴史的に朝鮮半島からの移住により形成されることとなった。民族が住みなれた地を離れ、他民族が生活する空間で生活を始めることは、必然的に他の民族の文化・生活習慣などに接触することになり、そこに文化間のやりとりが生じ、変化の契機が生じることになる。このような民族の移住にともなう文化の変化について、1997年度から1999年度にかけて、「中国における諸民族の移動と文化の動態 ―いわゆる周縁地域を中心として」と題する共同研究が国立民族博物館で行われた。この共同研究によって得られた成果を論文集としたものが塚田[2003]『民族の移動と文化の動態 ―中国周縁地域の歴史と現在』である。長谷川[2003]は、雲南省南部の西双版纳における人口動態と民族間関係について、民国期から現在に至るまでの長期間にわたって、どのような変化があったのかを調査・研究し、庄司 [2003] は、漢族の圧力に対して非漢族側が独自の文化を維持しえた例として、青海の土族の言語維持のケースを取り上げた。また、松岡 [2003] では、中国の四川のプミ・チベット族と雲南のプミ族を取り上げて比較検討をしており、家族・婚姻・家庭経済・年中行事を比較することを通して、両集団がそれぞれの地で他集団からの影響を受けた結果、相違点が多く見られるようになり文化のうえでも民族としても異なる道を歩むこととなった例として報告がなされている。塚田 [2003] では、壮族の婚姻習俗である「不落夫家」について、漢族からの影響を受けながらも、

漢俗を受容しても自らの文化的特徴を残すことのできる方式をとることにより、壮族独自の意味づけが維持されたことが報告されている。これらの報告が述べていることは、他文化との接触があれば、相互に影響し合い変化が生じることは避けられないということである。しかし、他文化の影響を受けながらも独自の文化を維持し続けた例や、別々の民族にまでなってしまうという例をみると、その文化を担う人々がどのような意識を持ち続けるかという点が変化に大きな影響を与えていることが窺える。

### 5-3. 婚姻儀礼に関する先行研究

伊賀上 [2002] は、帝政末期のロシア農民の婚姻儀礼について、分析対象を比較的狭い地域に限定し、経済的・社会的背景等を考慮し、参加親族の全行為を対象として、そこで用いられる語彙と儀礼行為の両面から分析を行ったものである。著者は、婚姻儀礼を調査対象とすることについて、「数ある農民儀礼の中で親族関係がもっとも広く観察できる結婚儀礼を選択し、そこに現れる儀礼行為と行為者の相関関係を観察した」と述べている。本論文においても、民族の移動で生じる異文化との接触による変化を見る上で、その影響を広く観察できる慣習が婚姻儀礼であると考え、調査対象としたのである。

金子 [2007] では、民族集団の異なる異性と結婚した人々の事例分析を通じて、現代インドネシアにおける民族集団に対する意識の変化や、その基底にある慣習・慣習法の社会的位置づけの変化について考察がなされている。

小牧 [1997] では、北インド・ムスリム社会においてなお根強く残っているヒンドゥー社会の慣習である婚姻儀礼と贈与交換について、北インド・ヒンドゥー社会と比較することにより、その特徴を明らかにし、今日の状況とその社会的背景について考察がなされている。

小川 [2004] では、奄美諸島の伝統的な婚姻習俗を説明する民謡と実際の婚礼歌が紹介され、諸行事の成り立ちや、現在行われている各行事の新旧について考察している。

中畑 [2005] では、人生儀礼においてもっとも大きなものである「婚姻」と「葬墓制」について調査し、そこで行われる儀式などから、その社会が持っている世界観、来世観についての考察がなされている。婚姻は、人の生活のなかできわめて重要な儀礼であるが、それだけに習俗として定着していた内容は人為的には容易に変更することができず、変化があるとすれば、異なる文化との接触があり、そこで何らかの選択を迫られるようなことがあった場合であるとすものである。

## 6. 朝鮮族の婚姻儀礼—文献資料から

筆者の調査対象者は、朝鮮族が朝鮮半島から中国へ移住してきた第一世代から第四世代までである。その間を比較するうえで、移住前の婚姻儀礼がどのようなものであったかを知るため

文献資料を用いた。文献資料としては『復刻版 韓国併合史研究資料 朝鮮風俗集』、『韓国民俗学概説』、『吉林朝鮮族』、『朝鮮族文化』、『韓国歳時記』と延辺朝鮮族自治州にある『延辺朝鮮族自治州博物館』の展示資料とパンフレットを使用する（注6）。

『朝鮮風俗集』は、1914年に書かれたものの復刻版であり、当時日本の統治下にある朝鮮で地方警察部長の職にあった日本人が、その職務遂行の必要から調査したものをまとめたものである。これによると、朝鮮で儒教が国教と定められた14世紀以前は、婚姻儀礼は新婦の家が中心となって実施されていたことがわかる。

新郎とその父、祖父が新婦の家に行き儀礼を実施する。新郎は長くて約半年ほど、短くて3日、新婦とその家族と同居した後、新婦と共に新郎の家に行く。よって、若い男性に結婚したかどうかを尋ねるとき「もう嫁の家に行ったか」と尋ねるのである。新婦の家での滞在期間は年代によって変化があると考えられるがその詳細を説明しているものはない。また、新郎新婦とも世話をするための介添人がついていた。

儒教の思想が入ってからは、儀礼の中心が新婦側であることは、天と地、陰と陽が逆さになるようなものであり、不自然な悪い習慣であると考えられた。新婦の家が中心となるこの習慣は否定され、男性が女性の家に行く方式から女性が男性の家に行く方式へと、儒教の思想に合うように変更されたのである。前者を「親迎」、後者を「半親迎」と呼称している。

儒教の思想が入った後の婚姻儀礼は四礼で構成されている。その過程は「議婚」、「納采」、「納幣」、「親迎」である（注7）。

「議婚」とは、仲介人によるお互いの結婚の意志の確認である。「納采」とは、互いの四柱を伝え（注8）、それを見て結婚の意志があれば、婚礼の日取りを決めるのである。「納幣」とは、男性側から女性側に結婚の意思を示した納幣文と贈り物を贈ることをいう。婚函という箱の中に許婚書、衣料品等を入れて贈るのである。

新婦の家で執り行われる婚姻儀礼を「大礼」、新郎の家で執り行われる婚姻儀礼を「后礼」という。婚姻儀礼の中で、重要なことは、クンサンという料理や食品を載せた机を用意すること、夫婦が永遠に共にいることを象徴した木製の雁を新郎から新婦の母へ贈ること、新婦の新郎の母へのクンジョル、新郎新婦が相見るサンギョンレ、新郎新婦が向かい合いお辞儀をするキョペレと杯を交わすハブクンレである。サンギョレ、コペレ、ハブクンレの後、新郎新婦は寝室に入り、クンサンをもらう。クンサンには食品が並べられ、その中でも特に目立つのは唐辛子を口にくわえた雄鶏である。朝鮮族にとっては、唐辛子の赤は魔よけの意味をもち、鳥は特別の意味を持つのである。クンサンの他にも、3つのゆで卵、米飯などの料理を乗せた机が用意される。ゆで卵は、新郎新婦が分け合って食べる。これは、結婚後、幸も不幸もお互いに分け合うという意味を持っている。用意された料理は、集まった人達と新郎の家の人達へも分けられる。今となっては遊び感覚で実施されているが、トンサレ（注9）も儒教の思想が入る以前は、新婦の家で実施されていた。就寝時は、新婦の髪のリボンをとる「頭玉里」と、帯をとる

「大発」という行為が実施される。

手段は、新郎は馬、新婦は籠に乗る。籠の上には虎の皮がかけられ、下には花の種と木炭が置かれた。全て、新郎の家に行く間に邪気を祓うための魔よけの意味を持つ。

后礼では、新婦がお土産とシッケを持って新郎の家に行き、宴会のときに新郎の両親、親戚へ贈り物を渡す。クンサンの上の食べ物は、手をつけずに新婦の家に持ち帰り、新婦の両親、親戚に渡す。二日目の朝、新婦は台所でご飯をつくり、料理をする能力があることを示す。三日間滞在した後、再び新婦の家に帰る。新郎は新婦の家に一日、二日泊まり、その後新婦を連れて新郎の家に戻る。これで、婚事は終了となる。

以上のように、朝鮮では14世紀に中国から儒教が導入されたことにより、婚姻儀礼での男性側女性側の立場が逆転するという変化が見られ、婚姻儀礼では四礼が重要視されるようになった。

## 7. 中国朝鮮族の婚姻儀礼—事例から

本章では、まず先に聞き取りからわかった中国朝鮮族の婚姻儀礼の基本となっている形式を述べ、その後2つの事例を紹介する。

結婚が決まると、あらかじめ納采が新郎から新婦へ贈られる。婚姻儀礼が実施される当日は、新郎が男性の友人などを介添人とし、オジや兄弟など男性3人程度で新婦の家に行く。

到着後、新郎新婦はそろって新婦の両親に深くとジョルをする。両親は新郎に言葉をかけて娘の幸福な将来を託す。その後、新婦側の親族、友人、知人、近所の人達と宴会を行う。

宴会後、新婦は、女性の友人などを介添人としてオジや兄弟など男性3人程度と新郎と一緒に新婦の家を出て新郎の家に行く。新婦はここで両親との別れをし、新郎の家、または新郎側が準備した宴会場へ行く。新郎の家ではなく、宴会場を使用した場合は、宴会終了後に新郎の家へ向かう。新婦はオジや兄弟と新郎の家に行き、新郎の両親、親族と酒を交わし挨拶を行い、新婦の介添人は新婦を残して帰宅する。この時点で新婦は実家の人々と別れ、それからは新郎側のみの人々と過ごすことになる。新郎新婦は新郎の両親にクンジョルをし、酒を交わす。夜は新郎の親族、知人、友人とトンサレをし、歌をうたい、踊りを踊り楽しい宴会を開く。その後、新郎新婦は初めての夜を迎える。次の日は、新郎の両親に再びクンジョルをした後、新郎新婦は新婦の実家に戻り、2、3日過ごした後、新郎の家に帰り新しい生活を始めるというものであった。

まとめると、先に新婦の家で、次に新郎の家で婚姻儀礼を実施するので、新郎新婦は一日に2度婚姻儀礼を行うことになる。

生活に余裕を持つことが困難であったが、少しでも朝鮮族の習慣で婚姻儀礼を実施しようとした一世代目のCさんの事例と、中国朝鮮族の基本的な習慣をもって婚姻儀礼を行ったOさん

の事例をとりあげ以下に示す。

事例1：Cさん（81歳，女性，出生年：1929年，出生地：韓国，一世代目）

1938年，18歳のときに結婚。夫は日本軍による強制連行を避けて中国へ渡った。Cさんは13歳の時に母とともに中国へ行く。夫と出身地が同じであるということで，周囲にすすめられ結婚した。婚姻儀礼の前，婚約した日には，少人数ではあるが村の人や親戚と一緒に食事をした。婚姻儀礼の当日は，夫の弟が買ってくれた古着のチマチョゴリを着用した。夫の家には夫の他，夫の父と弟がおり男3人の家族であった。自分の住んでいる村で簡単な婚姻儀礼を行い，母にクンジョルをし，その後歩いて夫の家まで行った。夫の家に到着してすぐに甘い水を柄杓から飲んだ。多くの食事は用意されなかったが，棗とゆでたまごと麺を少しずつ食べたことを記憶している。夫の父にクンジョルをし，その日の夜は村の人や夫の友人と遊びをして楽しんだ。Cさんも夫も知人は多くなかったので，全体的に小規模な婚姻儀礼であったという。2日目はCさんが持参した米とマッチを用いて米飯を炊き，夫の父にクンジョルをしてから食事をした。その時，お金はもらえなかった。3日目以降は実家に戻らなかった。なぜなら，夫の家には女手がないため，男三人の世話が必要であった。婚姻儀礼の1ヵ月後にやっと実家に戻った。

事例2：Oさん（37歳，女性，出生年：1973年，出生地：韓国，三世代目）

1998年に結婚。新婦は延辺で購入したチマチョゴリを着用。頭の飾りは友人が作ってくれた。介添人に化粧をしてもらい，新郎の到着を待つ。介添人もチマチョゴリを着用。新婦の家に着いた新郎は新婦が待つ部屋に向かうが，ドアのところで足止めをくらう。新婦の友人や親戚たちに，入りたければ金銭を出すように要求される。新郎は要求に従った後，新婦に会い花束を贈り，新郎新婦はお互いに赤いリボン洋服につけあった。その後，新郎の用意した車に，新婦と介添人は乗車し新婦側が用意した婚礼会場へ向かう。門を出るところで，新郎が再び金銭を払うように求められるという遊びがあった。新郎は要求通り金銭を渡し，新婦の家をあとにした。会場に到着後，別室で待っていた新婦の両親のもとへいく。新郎新婦はソファに腰掛けた新婦の両親の前に座りクンジョルをする。両親から新郎へ娘を頼みますとといった言葉をかけ，新婦は涙を流す。会場にはクンサンが用意され，その前で新郎新婦はゆでたまご，棗，麺などを食べる。記念写真の撮影をした後，客へ酒や料理がふるまわれる。招待されているのは新婦の親戚，知人，友人，同僚などである。

その後，新郎の家へ向かう。新婦側は新婦のオジと兄が新婦に同行する。新郎の家に到着すると，爆竹が鳴らされ，新婦は柄杓に入った水を飲む。新郎は新婦を背負い家に入る。雄鶏，鯉，餅などの食品が乗ったクンサンが用意され，新郎新婦はその前に座り棗，ゆでたまご，麺などを食べる。宴会が終了すると，別室で新郎新婦と，新婦の同行人，新郎の両親と親戚のみで，酒が交わされ，各自が一言ずつ話しをした。円になり座り，新婦が一人ずつ酒を盛ると，

その人は自己紹介を兼ねた一言を述べ、新婦にお金を渡す。その後、新婦に同行してきたオジと兄は帰宅する。新婦はいよいよこれが新婦側の人との別れとなり涙ながらの別れを行う。新婦はその後、新郎側の人達のみと過ごすことになる。新郎新婦は改めて、両親にジョルをし、新婦は酒を盛りそして両親から金銭を受け取る。夜は新郎側の親戚や友人達と宴会を行う。宴会では、新郎に様々な要求をして、応えなければ棒を持って新郎の足をたたくという伝統的なトンスレをし、歌をうたい、踊り酒を飲んだ。

## 8. 納采と衣裳

朝鮮族には、婚約した後男性側から女性側へ「納采」と呼ばれる婚資を贈る習慣がある。納采は金銭ではなく、櫃やチマチョゴリ、生地、寝具などの物で贈るのがしきたりである [鄭・李 1996: 43-44]。

櫃については、A 夫人がアラ底朝鮮族村 (注 10) に住んでいた時の家の室内には、朝鮮族の伝統的な櫃が置かれていた。夫婦は都市へ引越したので、納采の 1 つであった櫃は農村の家に置いてきたという。1972 年に結婚した M さんは結婚前に夫から櫃を贈与された。一方、1998 年に結婚した O さんの家には該当する櫃はなかった。マンションの家には作りつけのクローゼットがあるので必要ないのである。

都市で生活するようになり、また、家具つきの住居に住むことで、櫃の必要性がなくなり、婚資に櫃が贈られることがなくなってきていることがうかがえる。日本でも、結婚の時の花嫁道具として花嫁簞笥を用意するという習慣が、居住空間の変化に伴い少なくなってきたのと同様である。

納采の中に必ず入っている衣裳についてだが、絹などの布が贈られそれを使用して婚礼当日の衣裳を仕立てるという習慣は、1990 年代に結婚した 4 人の聞き取り内容と一致している。しかし、一世代目の C さんは中古の白いチマチョゴリを使用しており、また、2009 年に結婚した Y さんのチマチョゴリは韓国にいる親戚から送られたものである。Y さんは、チマチョゴリのほかに白いウェディングドレスも着用した (写真 1)。

Y さん以外の人達の頭部の飾りは花飾りにベールをつけるという自家製ものが主流であった (写真 2)。しかし、2009 年に結婚した Y さんは、チマチョゴリ着用時に小さな帽子をかぶった (写真 3)。この帽子は吉林では買えず、韓国に出稼ぎに行った親戚から送ってもらったのである。



写真1 2009年（吉林市）



写真2 1981年（吉林市）



写真3 2009年（吉林市）

以上のことからすると、新郎から新婦へ納采として贈られる布は、婚礼で着用する衣裳の変化とも関係していることが考えられる。女性の衣裳は、韓国製の伝統衣裳を着用することで、布から仕立てることは少なくなることが推測され、布から既製品への変化、または中国製から韓国製への変化、そして西洋式の白いドレスの着用という新しいスタイルが見られる。しかし、婚資として女性が婚礼で着用する衣裳のための布や既製品衣裳を男性が女性に贈る習慣に大きな変化はないことが明らかになった。また、新郎は、一世代目からすでに朝鮮の伝統的な婚礼衣裳の着用は見られない。一、二世代目は普段より少し良い服を着用、その後はジャケットを羽織るか、スーツの着用である。2009年に結婚したYさんの時も、新婦がチマチョゴリと白いウェディングドレスを着たのに対し、新郎は一着の婚礼用スーツの着用のみで、お色直しはなかった。

## 9. 場所と移動について

第一世代は、宴会を行う余裕などはなく簡単に両親へのクンジョルを実施し、少人数で小規模な食事をしている。それより後の1960年代に結婚した人は、徐々に生活が安定し宴会も実施している。新郎新婦が各家で実施するクンジョルやその後の宴会場所は、家から会館、またはレストランというように外に拡大していつている。40、50歳代の第三世代になると、家で実施する場合とレストランや会館で実施する場合との両方があった。

新郎が新婦を迎えに行くことは同じであるが、両親へのクンジョルも必ずしも家でとりおこなわれてはいない。2009年に観察した20歳代のYさんは吉林市内の阿里郎大飯店を会場とし

て挙行した。会館に両家の両親、親族、友人、知人が同席して合同で宴会を実施している。そのため、本来は新郎の家に到着した時点で飲む瓢箪に入った水も、宴会会場に到着した時点で実施している。そして、宴会が終わったあと、新郎新婦はそのまま新居へ帰るといふ。注目すべき点は、中国朝鮮族の習慣をよく理解している朝鮮族専用の阿里郎大飯店を利用したということである。

中国朝鮮族の婚礼ではかかせない、大きなクンサンを用意することを考慮すると、数段利用しやすいのである。

未婚ではあるが、20歳代のQさんも将来自分が結婚した時、新郎新婦の実家が近い場合はよいが、遠い場合、または仕事が忙しいときは、婚姻儀礼、宴会は新郎新婦が合同で行うのがよいと考えている。

移動する際の手段も産業の発達とともに変化している。Aさんを始め60、70歳代の第二世代の人たちは、新郎が牛車やトラックに乗って新婦の家に来たという。当時は村の人同士で結婚することが多かったので、牛車で村を回ることもあった。現在は赤やピンクのリボンや風船で華やかに装飾された黒塗りの車が使用される。これは、漢族も同様であり、むしろ現在の中国の習慣である。新婦は、家を出てから新郎の家に着くまで地面に足をつけてはならない。新婦は新婦の兄弟に背負ってもらい車に乗車し、新郎の家に着いてからは新郎に背負ってもらい家に入る。

## 10. クンサン

中国朝鮮族の人生儀礼で欠かすことのできないクンサンは年々豪華になっており（写真4、5）、朝鮮族の伝統的な数種類の餅、スンデ、鯉、雄鶏、ケーキなどの菓子類が並べられている。中国朝鮮族では身内だけではなく招待客にもクンサンが披露され、クンサンの前で棗やゆで卵などを食べることが1つのショーのようにになっている。棗は子宝を意味しており、伝統的な食べ方は、新郎の母が新婦のスカートの上に投げ、それを食べるのである。

聞き取りでは、ゆで卵も子宝を祈願して新郎新婦が食べるということであった。しかし、延辺朝鮮族自治州博物館の展示からは、夫婦間における様々な苦労を二人で分かち合うためにゆで卵を二人で食べるようになっていた。

## 11. クンジョル

新郎新婦がそれぞれの両親に対して行うジョル、クンジョルは今日でも必ず実施される。しかし、朝鮮でのやり方は新婦が新郎の母へのみ実施するものだが、中国朝鮮族は両家の両親に対して、新郎新婦が揃って実施する。その名残か、新郎側の両親へは、通常のジョルよりも厳



写真 4 1980 年代



写真 5 2009 年

かなクンジョルがなされ、新婦の両親へはジョルと呼ばれる通常の歳拝を実施する。

中国朝鮮族が行うジョルを実施するということに変化はないが、移住前の朝鮮の習慣と中国朝鮮族の習慣には違いが見られた。

## 12. その他

トンサレは規模や加減は小さくなっているが、廃れることなく実施されている。しかし、朝鮮でのやり方とは異なる。2009 年の Y さんの場合は新郎の家に宿泊しないため、トレスンは実施されなかった。

新郎の家に着いた時に柄杓に入った水を新婦が飲む習慣は、木製からプラスチック製、または飲む場所の変化はあっても実施されている。このいわれは定かではなく、聞取りからは、新郎の家に早く慣れること、口を慎むためではないかという話があったがよく理解されていないようだった。また、文献資料からもこのことについての記述は一切ない。どこの習慣のもので、なぜ実施されるのかは、今後更に調査が必要である。婚姻儀礼中に柄杓を投げるという行為もあり、これは将来を占う行為である。柄杓が割れれば、困難にあうことはないと言われている。しかし実際には、今日使用されている柄杓は、瓢箪ではなくプラスチック製なので割れることはない。しかし、瓢箪を半分にした形の柄杓は朝鮮族固有の物であり、朝鮮族の象徴でもあるので、形式だけではあるがこの行為を実施しているのである。

### 13. まとめ

朝鮮族の婚姻儀礼の変化を、1998年から2009年にかけて比較すると、クンジョルを代表とした儒教的伝統的習慣は伝承されていることがわかる。中国朝鮮族の場合、新郎新婦が揃って、それぞれの両親に対して行うというように独自の慣習が生まれている。

朝鮮族の婚礼は儒教「四礼」の考えに基づいており、結婚を決める「議婚」、占いにより婚礼の日取りを決める「納采」、花婿が花嫁へ婚資を贈る「納幣」、婚礼儀礼である「親迎」である[金 2000:83]。

中国朝鮮族が現在行っていることは、この中の「納幣」と「親迎」である。中国朝鮮族の婚姻儀礼は、正式な儒教の教えに沿ったものではなくはなれているが、本来14世紀に中国から導入したものであるため、移住後も比較的それを伝承しやすかったという一面がある。すでに中国では儒教自体が中国人の生活意識を占めるものでは無くなっているが、中国朝鮮族はこれを自分たちのものとして今も尚、儒教の教えにそう慣習を残し続けている。

婚姻儀礼の場所は、大礼と后礼を2箇所ですることの負担が大きくなり、1箇所で行うようにして合理的にしようという考えが出てきている。女性の伝統的衣裳であるチマチョゴリは年々豪華になっていくが、韓国にいる出稼ぎ者から送られる衣裳が使用されるようになり、出稼ぎという行為を通して、韓国文化の再導入が見られる。しかし、その再導入の仕方は独自の理解に基づくものであり、必ずしも韓国での正式なやり方を模倣しようとするものではない。Yさんの帽子のように、綺麗だからなどという単純な理由からの再導入であり、韓国では、Yさんのものとは別に、正式な帽子が今日も着用されている。

全体的には、朝鮮族がもともと行っていた行為の簡略化と追加の両方が見られる。また、今日の中国朝鮮族の婚姻儀礼が、中国と西洋の習慣の導入と、韓国からの再導入を行いながら時代の流れに合わせて形成されていることが明らかである。

中国朝鮮族においてみられる儀礼の態様の変化は、その変化の原因となった事情・要因などを考慮すると、必ずしも中国朝鮮族に固有の原因によって生じたものといえないものが多い。近代化の波や、経済自由化などという全く異なる一種の文化流入による社会環境の変化があり、それに伴って人々の意識にも変化が生まれるということは、他民族の社会においても同様に生じていることでもある。

煎本[2007:319]では、次のように述べられている。「集団とその集団が継承してきた文化は、他の集団や文化との接触により変化する。(中略)、現実に時間を逆行させることは不可能なので、伝統は現実との間で折り合いをつけ、新たな文化の創造が行われ、あるいは政治的解決がはかられることになる」。

中国朝鮮族は、朝鮮半島から移住をし、その結果中国の漢民族などの他の民族との接触をもつこととなり、上記のような文化的変化と融合の過程が進行するに至った。これに対し、中国

朝鮮族の人々は、自己の文化を放棄することなく意識し続け、自らの選択と実践で何らかの形で継承し続けてきた。しかし、煎本 [2007] で述べられているように、現実には時間を逆行させることは不可能であり、継承したと信じた文化も、本来のものと全く同じものというわけではないのである。

(こさか みゆき・歴史地域文化学専攻)

## 注

- (注1) ドンプグクア新聞 <http://www.dbanews.com/news/read.php?idxn=13458>
- (注2) 国家统计局人口和社会科技统计司・国家民族事务委员会经济发展司(編) 2003 『2000年人口普查 中国民族人口資料』上冊, 北京, 中国: 民族出版社
- (注3) 2008年2月22日実施: 吉林市朝鮮族中学校の高校生男女(203名) 2009年10月11日, 12日実施: 永吉県朝鮮族中学校, 吉林市朝鮮族中学校の高校1年生, 男女(123名)  
※自由回答の和訳については中国語を母国後とする者の確認を得た  
設問: 「家族に出稼ぎに行っている人はいるか」, 回答: 2008年「いる161人」「いない42人」, 2009年「いる98人」「いない25人」
- (注4) 経験的参与観察とは、住民とともに生活するという参与観察をさらに進め、観察者が対象者の生活技術と行動を学び修得するという、より積極的な調査方法。観察者は日常の活動の経験により、知識と技術を学ぶことができる(煎本1996 pp 16-21)。
- (注5) ビデオは1998年に実施された婚姻儀礼のものであり、参与観察は2009年に実施された婚姻儀礼の一部、披露宴での観察データのみである。
- (注6) 2001年(1914年)『朝鮮風俗集』(pp 50-61), 1977年『韓国民俗学概説』(pp 57-69), 1993年『吉林朝鮮族』(pp 405-408), 1990年『朝鮮族文化』(pp 205-207), 2000年『韓国歳時記』(pp 80-88)と延辺朝鮮族自治州にある『延辺朝鮮族自治州博物館』の展示、パンフレットを使用
- (注7) 朝鮮族の婚礼は儒教の考えに基づいており、本来は六礼である(金 2000: 83)。六礼とは、「納采」、「問名」、「納吉」、「納徴」、「請期」、「親迎」をさす。
- (注8) 四柱とは、生まれた年、月、日、時刻を意味する
- (注9) トンサレの由来は、新郎が東側の床に立って儀礼が行われたことから生まれている。トンサレはもともと新郎の感謝の気持ちを表すところであったが、今では婚姻儀礼が終わった後、新婦の親戚や友人たちと飲食をしながら行われる遊びの1つである。もともとは新郎が感謝の気持ちを述べるものであったが、新郎の足を叩いたり、吊るしたりして一見いじめているようだが、早く親しくなるようにという意味がこめられている(朴 2000: pp 97-98)
- (注10) アラ底朝鮮族村は、中国吉林省吉林市の中心部から車で約1時間程にある朝鮮族村である。1931年に朝鮮半島からの移住者により開墾された。現在は離農する中国朝鮮族が増加している

## 参考文献

Arnold van Gennep

1909 (1997) RITES DE PASSAGE (『通過儀礼』綾部恒雄・祐子(訳), 弘文堂)  
伊賀上菜穂

- 2002 「結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係——記述資料分析の試み——」スラブ研究, pp 179-212, 北海道スラブ研究センター
- 今村 鞆  
2001 (1914) 『復刻版 韓国併合史研究資料 朝鮮風俗集』 龍溪書舎
- 煎本 孝  
1996 『文化の自然誌』 東京大学出版会  
2007 「未来の民族性と帰属性」『北の民の人類学 強国に生きる民族性と帰属性』 煎本孝・山田孝子 (編), pp.317-328, 京都大学学術出版会
- 小川 学夫  
2004 「奄美の婚姻習俗と関連民謡」 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第34号, pp 37-56
- 金子 正徳  
2007 「アダット (慣習) とクプダヤアン (文化) —— インドネシア・ランブン州プビアン人社会における婚姻儀礼の事例を中心として ——」 文化人類学 72/1, pp 1-20
- 韓景 旭  
1996 「中国朝鮮族にみる村の生活 —— 吉林省星火村の調査報告」『国立民族学博物館調査報告』 21(3): 569-634, 大阪: 国立民族学博物館  
2001 『韓国・朝鮮系中国人 —— 朝鮮族』 福岡: 中国書店
- 金 渙  
2000 『韓国歳時記』 明石書店
- 金泰 賢  
2007 「資料 東北アジアの越境する外国人労働者の人口 —— 韓国編」『越境する移動とコミュニティの再構築』 佐々木衛 (編著), pp.100-104, 東方書店
- 金助 東・金昌 浩  
1990 『朝鮮族文化』 吉林: 吉林教育出版社
- 金濟・金仁 哲  
1993 『吉林朝鮮族』 吉林: 吉林人民出版社
- 権秦 煥 (クォン・テハン)  
2007 「見通しが立たない朝鮮族の将来」『ディアスポラとしてのコリアン』 高全恵星 (監), pp. 290-319, 新幹社
- 高全 恵星  
2007 『ディアスポラとしてのコリアン』 高全恵星 (監), 新幹社
- 国家統計局人口和社会科技統計司・国家民族事務委員会經濟發展司 (編)  
2003 『2000年人口普查 中国民族人口資料』 上冊, 北京, 中国: 民族出版社
- 小牧 幸代  
1997 「北インド・ムスリム社会の婚姻儀礼と贈与交換 —— ウッタール・プラデーシュ州 C 町のサイフィー・ピラーダリーの事例から」 アジア・アフリカ言語文化研究 54, pp 195-214
- 櫻井 龍彦 (編)  
2004 『東北アジア朝鮮民族の多角的研究』 株式会社ユニテ
- 庄司 博史  
2003 「土族語はなぜ残ったか —— 青海土 (トゥー) 族の漢化と母語維持」『民族の移動と文化の動態 —— 中国周縁地域の歴史と現在』 塚田誠之 (編), pp 343-417, 風響社
- 中国朝鮮族研究会 (編)

- 2006 『中国朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク — 「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』 アジア経済文化研究所
- 張籌根
- 2003 『韓国の歳時習俗』 兎玉仁夫（訳），法制大学出版
- 塚田誠之（編）
- 2003 『民族の移動と文化の動態 — 中国周縁地域の歴史と現在』 風響社
- 塚田誠之
- 2003 「壮族の婚姻習俗『不落夫家』に関する一事例 — 1949年以前の広西西部靖西県安德鎮における」 『民族の移動と文化の動態 — 中国周縁地域の歴史と現在』 塚田誠之（編），pp 605-643，風響社
- 塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子（編）
- 2001 『流動する民族 — 中国南部の移住とエスニシティ —』 平凡社
- 鄭吉雲・李京燮
- 1996 「朝鮮族」 『中国少数民族の婚姻と家族』 上巻，pp 41-53，第一書房
- 中畑充弘
- 2005 「北部沖縄の婚姻儀礼と葬墓制に関する文化人類学的研究 — 沖縄・本部町備瀬の事例を中心に —」 古代学研究紀要第3号，pp 71-99
- 聶莉莉（ニエ・リリ）
- 2005 「中国朝鮮族の民族的ネットワークと連帯感」 『アジア遊学 特集 東アジアのグローバル化』 81号：pp 24-37，勉誠出版
- バーナード・オリビエ
- 2007 「中国東北部コリアンの政治的手段としての民族性（エスニシティ） — 1945年以前から現在まで —」 『ディアスポラとしてのコリアン』 高全恵星（監），pp.270-289，新幹社
- 長谷川清
- 2003 「フロンティアにおける人口流動と民族間関係 — 雲南省，西双版纳タイ族自治州の事例」 『民族の移動と文化の動態 — 中国周縁地域の歴史と現在』 塚田誠之（編），pp 239-291，風響社
- VICTOR W. Turner
- 1969 (1996) *The Ritual Process*. Praeger. (『儀礼の過程』 富倉光雄訳，新思検索社)
- 2006 『儀礼の過程』 新思索社
- 松岡正子
- 2003 「「西番」におけるプミ語集団 — 四川桃巴プミ・チベット族と雲南箐花プミ族を事例として」 『民族の移動と文化の動態 — 中国周縁地域の歴史と現在』 塚田誠之（編），pp 419-475，風響社
- 禹鐘烈
- 2009 『朝鮮族』 沈陽：遼寧民族出版社
- 依田千百子
- 1985 『朝鮮民俗文化の研究：朝鮮の基層文化とその源流をめぐって』 瑠璃書房
- 若松實（編著）
- 1982 『韓国の冠婚葬祭』 高麗書林
- 李杜鉉・李光奎・張根・崔吉城
- 1977 『韓国民俗学概説』 学生社
- 李愛俐娥
- 2007 「沿海州コリアンコミュニティの現状にみるもの」 『国立民族学博物館調査報告 グローバル化と韓国社会 — その内と外』 朝倉敏夫・岡田浩樹（編），69：201-208，国立民族学博物館